

# 日本一の果報者

大島正満

今から約50年前、相州三崎町のかたほとりに、東大臨海実験所の前身であつたささやかな研究所が建てられた。その建物の中で若い學究達が海産動物を熱心に研究する様を、興味と熱意とを以てのぞきに來る利發さうな青年漁夫があつた。その卒直な性質と無學ながらも研究心に燃えてゐる態度とが、我國動物學界の先進達に認められ、彼は大學專任の採集夫を命ぜられた。その若者を指導活用したのが箕作飯島等の諸先生であつたのだから、その男が物識りになつたのは當然である。且つ又實物につき最初から學名で各種の動物の名を教へ込まれたので、神戸や横濱あたりの車夫達が口にする英語と同様、書いたり讀んだりその意味を理解したりすることは出來ないにも拘はらず、羅典語の學名を何の苦もなく云つてのける位のは朝飯前のこととなつた。かくして出來上つたのが、ナポリ臨海実験所の名物男ロピアンコに比肩すべき三崎の熊さんであつた。

「熊さん、あそこに着生してゐる海綿は何と云ふ名だネ。」

「あれか、あれはろくでもねえ海綿だからデモスポンギアよ。」

熊さんの頭に刻み込まれてゐる學名の由來はこの種類のものが多いやうだが、現今世に行はれてゐる海産動物の和名には、當意即妙の熊さんが名づけ親となつてゐるものがどれほどあるか茲には一寸挙げきれぬ。海底からあんぱんのやうな形の海膽を拾ひ上げて、「章魚が枕にして寝るものだんべーよ」と云つたのが動機でタコノマクラと云ふ名稱が生れ出た。平たい煎餅のやうな海膽がカシパン、その周縁に孔があいてゐるのがスカシパン、稍々ふくれ上つた圓味のある海膽がブンブクチャガマ、これ等凡てが熊さんの即興詩人的頭腦のひらめきから生れ出たものであることは事新しく述ぶるまでもないが、博覽強記とも云ふべき彼の頭腦には相模灘に棲息する動物の凡てがその影を宿してゐるであらうと云はれてゐる。

我々が油壺へ通つた頃には、朝まだき靈岸島から魚臭紛々たる小汽船の客となつて三崎港に向ふのが常道であり、埠頭に躍りあがると同時に先づ熊さんの居宅を訪れるのがしきたりであつた。その頃の熊さんの家の前には動物商と書いてある軒燈が掲げてあつた。動物商とは海産動物標本商と云ふ意味であつたことは勿論だが、その頃の動物商青木熊吉の名は、日本の海産動物を手に入れたい外國の學者達から、注文の手紙が何通となく來るほど、天下に鳴り響いてゐた。

その熊さんが時折横文字の手紙を持つて來て、「返事をやるべえと思ふから、用向きを見くらせえ」と頼みに來ることが一再でなかつたが、羅典の學名をスラスラと吐き出す奇態な能力の持主でありながら、眼に一丁字のない明き盲であつたのは珍らしい。その不自由さに同情したのであらう後年親切な學生が熊さんに片假名を教へ込んだ。それ以來明き盲の眼が

動物學雜誌、第52巻、第9號、青木熊吉翁喜壽祝賀特報號、昭和15年(1940)

開いて熊さんも假名文字の手紙を書いたり、肌身離さず所持してゐる手帳に覚えを書き記るしたりするやうになつたが、それ以來俊敏であつた熊さんの記憶力はいたく減退したと云ふ定評であつた。その手帳の表紙には「オボ帳」と記るしてあつた。これは覚え帳のことである。

漁村に過ぎなかつた三崎港も世の進運に連れて賑かさを増して來た。そして實驗所の周圍も俗塵が立ち込めて學問をするには不適當な空氣が醸成されて來た。或る日箕作先生が熊さんと呼んで、「何處かこのあたりに俗人が絶対にやつて來ないもの 靜な場所はないものかナー」と問ひかけられた。「三浦荒次郎が腹を切つて飛び込んだ油壺と云ふ場所が御座ります。あそこなら古來人が恐れをなして近よりません」との答を耳にされた先生は、「熊、すぐさまそこへ案内せよ」と仰せられた。「俺が櫓を押して人影の無い油壺の灣内深く漕ぎ入つたら、滅多に笑はない箕作先生が相好を崩して喜ばれたよ、そして此處だ此處だと云はれて地を相せられたのが現今の實驗所のある場處だが、三浦一族の亡靈が浮ぶと云はれたその油壺の今日の賑かさはどうしたものだ。引つきりなしに遊覽船が來る、ホテルは出来る、土産物の賣店は立ち並ぶ、箕作先生も冥土で顔をしかめて御座らつせるだらうナー」とは夏を迎へた實驗所の埠頭に立つ熊さんの述懐であつた。

或る夏のことであつた、水族館に入れやうと思つてブダビを漁船から運びあげてゐる最中、彌次で有名な狸と呼ばれた學生がノコノコ波止場へやつて來た。

「オイ熊さん、ブダビとはどう云ふわけだらう。」

「さうよナー、ブとは總じて悪いと云ふことだよ。不行儀・不作法・ぶざま・無禮などと云ふやうに、まア良いことではねえな。お前なんか人間の中でも「ぶをとこ」と云ふやつだ。これは鯛に似て不恰好な奴だからブダビだアネ。」

眼をしばだたきながら熊さんが放つた巨砲には、さすがの狸も美事に打ちとめられた。

新米の學生が満潮時にポートをしつかり埠止場に縛りつけて置くのを見た熊さんが、

「夜半にポートが首を吊るぞツ」とどなつてゐるのを耳にした人も多からうが、潮の引いた朝早く埠頭に來て見ると、なるほど潮に置き去りにされたポートが、水際の抗を抱いて直立してゐるの見受けることが一再でなかつた。

「綱をのばして舟をつなぐことを知らねえ奴は素人だ」

と熊さんは述懐するが、かくしてポートのつなぎ方から熊さんの教を受けた連中も尠くはないことであらう。

日本に來て見ると、何處へ行つても鶴と龜とが飾つてあるので、或るアメリカの學者がこの二つは夫婦だらうと目星をつけた。そこで鶴と龜とを土産に買つて歸つたが、國へ持つて歸つたらどうもこの二つの仲が宜しくない。そこで鶴が氣をくさらし

「龜さん龜さん、わしの頸や脚の長いのがお嫌か」

と尋ねて見た。ところが

「いや何もいやでは御座んせん。然し昔から譬に云ふじやねえか、鶴は千年龜は萬年と。わたしや遠いアメリカで九千年の後家を通すのがいやでござんす」

と龜が云つたとよ——と熊さんはひょうけた顔をして自作の落し噺に人を煙にまく。酒は飲まず煙草は吸はず、飄々乎としたところにこの男の味がある。

飯島先生が借老同穴海綿を採集せんがため比律賓に遠征された際、その助手として同行の榮を擔つたのは血氣盛んな熊さんであつたが、その折の苦心を語る熊さんの面には得意の色が現はれるのが常であつた。その關係であらうか實驗所の標本室に客を案内して説明の言葉が最高潮に達するのが借老同穴海綿の標本を格納したケースの前であつた。或る夏の日のこと學者らしい顔かたちの紳士が二三人連れだつて借老同穴海綿をのぞき込んだ。折からそこにイんでゐた熊さんが、ユープレクテラ・マーシヤリイ、ユープレクテラ・インペリアーリスと得意の學名を並べたてた上に、小蝦と共棲する不思議な生態を物語り、「何故に小蝦の夫婦がせま苦しい海綿の体内で一生涯を過すかと云ふと、それは生れた我子を安全に育てたいと云ふ親心からである。若し我子棄てて顧みないやうな不心得な親があつたら、わつしのところへ電報を打ちなさい。見せしめのために借老同穴の標本を送つてやらう。尙又見にくい夫婦嘩に憂き身をやつす人があつたら欠つ張り電報をよこすことだ。海綿の腹の中でむつましく生死を共にする小蝦の夫婦の姿を見せてやらうぜ」と辯舌さはやかにまくしたてた。

説法をされた紳士の一人が妙な顔をしてゐたが、その人こそ物理學界の泰斗で家棄てて妻子を棄てて一時は噂の種を蒔いた某博士であつた。「熊さん今日はえらい傑作をやつたネ」と巨砲にやられた人の身許を語り聞かせたら、「悪るいことをしたなア、詫びの手紙を出すべいか」とさすがの熊さんも大恐縮の態であつた。

飯島先生が實驗所の所長として油壺に滞在して居られた或る日のこと、御幼小であらせられた日の御子の御兄弟が、葉山御用邸から御微行で油壺の實驗所へ成らせられた。御歡待の一助にもと飯島所長は御二方を水族室に御案内申上げ、折から蓄養してあつた烏賊の泳ぎ振りを御説明申し上げた。興深く御覧になつた日の御子は御手づからたもを取つて烏賊を掬ひ上げられたが、禮儀をわきまへぬ烏賊の奴が何をと云はんばかりに墨をバツと吐き出した。それが又飯島先生の介補として立つてゐた熊さんの顔へまともに發射されたので、着てゐた白服は眞つ黒になる。顔は印度人そつくりになる、一座の人々がその様を見てワツと笑ひくづれた。時ならぬどよめきに御警衛の人々があはてふためいて駈けつけると云ふ喜劇を演じたが、その際御幼小の日の御子が「爺や怒るなよ、御所へ歸つたら新しい服をやるぞ」と仰せられたと云ふ。

それ以來長の歲月、その當時の様を物語る毎に

「日本國廣しと雖、御上に貸があるのは俺一人だ。其後新しい洋服は戴かなかつた」と熊さんは得意さうな顔をしてゐたが、畏くも兩陛下御揃ひで油壺へ行幸啓を仰せ出された際事務打合はせのため葉山御用邸へ伺候した筆者は、側近の方々に右の話を申し上げた。「それは愉快なことだ、機を見て言上して見やう」とのことであつたが、榮ある行幸啓のその日のこと、破格の思し召しによつて青木熊吉は侍従の許へ召し出された。そして洋服代としての金一封を賜はつた上に、「これで當方には借りは無いぞよ」と申渡された。これで熊さんの自慢の種は完全に封じられた。然し日本一の果報者としてその榮譽は長く郷黨の間に輝いた。